慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	止まった時計
Sub Title	Stopped clocks
Author	浜, 日出夫(Hama, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2017
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.90, No.1 (2017. 1) ,p.75- 90
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	有末賢教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20170128-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

止まった時計

浜日出夫

1　止まった時計
2　近代社会とクロックタイム
3　二つの時間――水平に流れ去る時間・垂直に積み重なる時間――
4　二つの時間が出会うとき

1　止まった時計

調査で歩いていると各地で止まった時計に出会う。たとえば、広島市の広島平和記念資料館では八時一五分で止まった時計を見ることができるし（**写真1**）、神戸市三宮の東遊園地には五時四六分で止まった時計をかかえ持つビーナス像が立っている（**写真2**）。そのほかにも二時四六分で止まった時計（宮城県名取市・閖上中学校、**写真3**）、六時五六分で止まった時計（東京都大田区・日本航空安全啓発センター）、一一時二分で止まった時計（長崎原爆資料館）、一一時五八分で止まった時計（東京都墨田区横網町公園・東京都復興記念館、**写真4**）などがある。



写真１　（著者撮影）



写真２　（著者撮影）

これらはそれぞれ広島への原爆投下時刻（一九四五年八月六日午前八時一五分）、阪神・淡路大震災発生時刻（一九九五年一月一七日午前五時四六分）、東日本大震災発生時刻（二〇一一年三月一一日午後二時四六分）、日本航空１２３便墜落時刻（一九八五年八月一二日午後六時五六分）、長崎への原爆投下時刻（一九四五年八月九日午前一一時二分）、関東大震災発生時刻（一九二三年九月一日午前一一時五八分）を指して止まっている。

時計の機能は時を刻み、時刻を表示することである。止まった時計はもはや時を刻まない。これらの時計を見ても、今何時なのか、知ることはできない。にもかかわらず、これらの時計は、役に立たないからという理由で捨てられることなく、止まったままの状態で保存されている。なぜもはや時計として機能していない時計が保存されているのだろうか。本稿では、止まった時計を手がかりとして近代社会と時間の関係について考察してみたい。

2　近代社会とクロックタイム

近代社会が時計なしに成り立たないことは明らかである。すでに一世紀以上前に、ジンメルは「ベルリンのすべての時計が突然狂って異なった方向へ進めば、たとえそれがたんに一時間だけであっても、すべての経済的その他の取引生活は、長きにわたって混乱するであろう」（Simmel [1903] 1957=1998: 190–1）

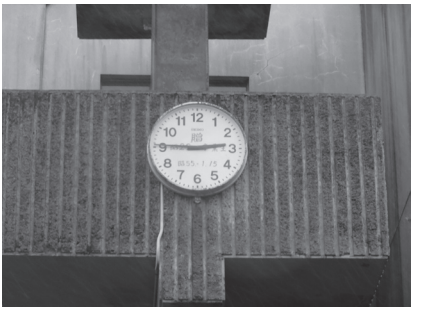


写真３　（著者撮影）



写真４　（著者撮影）

と書いた。これは近代社会が時計によって示されるクロックタイムなしに成り立たないことについての早い時期の指摘である。

ギデンズは伝統的社会から近代社会への移行の指標を「時間と空間の分離」に求めている。伝統的世界では時間と場所は結びついていた。たとえば江戸時代には、夜明けに「明六つ」の鐘が鳴り、日暮れに「暮六つ」の鐘が鳴るというように、太陽の動きにしたがって時刻が表示されたが、夜明けや日暮れの時刻は場所によって異なるため、時間と場所は切り離すことができなかった。すなわち「いつ」はつねに「どこ」と結びついていたのである（Giddens 1990=1993: 31）。しかし、近代社会へ移行し、時刻が機械時計によって表示されるようになると、時間と空間は分離する。機械時計が表示する時刻は、一定の範域内であれば場所に関係なくどこでも同じである。そしてその結果、相互行為の「脱埋め込み化」が生じる（Giddens 1990=1993: 35）。

相互行為はかならず行為者の間での時間的な調整を必要とする。したがって、時間と場所が結びついていた伝統的世界では、相互行為もまた時を告げる鐘の音が聞こえる範囲に埋め込まれていた。しかし、機械時計が場所と無関係にどこでも同じ時刻を表示するようになると、相互行為もまたローカルな場所から解き放たれ、空間的に遠く離れた行為者の間でも相互行為が可能となる。たとえば、空間的に離れた二つの駅にある時計と、列車の運転手が持っている時計が同じ時刻を指していることによってはじめて、列車の運行は可能となる。そ

して、鉄道だけでなく、学校、工場、銀行など、あらゆる近代的な制度は、空間的に分散している多くの行為者の行為が、同じ時刻を指す時計によって調整されることによって可能となっている、さらに、ナショナルな時間がグローバルな時間に組み込まれている今日では、相互行為のネットワークもグローバルに拡大しており、もしベルリンの時計が突然すべて狂えば、混乱はベルリンやドイツ国内にはとどまらず、全世界に波及するだろう。

ジンメルやギデンズが指摘したとおり、近代社会が、動いている時計が示すクロックタイムなしに成り立たないことは間違いない（浜 二〇一三b）。それでは相互行為の時間的調整のためには役に立たないはずの止まった時計が保存されているのはなぜだろうか。それは、動いている時計が刻む時間とは異なる時間を、止まった時計が刻んでいるからではないだろうか。

3　二つの時間――水平に流れ去る時間・垂直に積み重なる時間――

(1)　フッサールの時間図表

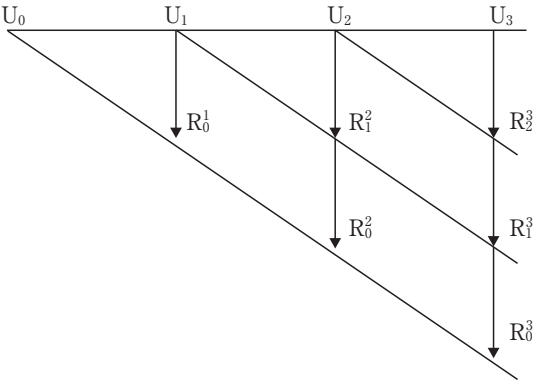
私たちはふつう時間を表すために一本の矢印を書く。これは過去から現在を経て未来へと続く時間の流れを表現するものである。これに対して、フッサールは時間を次のような時間図表（Zeitdiagram）として表現した（図1）。

時間図表の横軸は次々に現れては消えていく根元的印象（Urimpression）の系列を示している。ベートーベンの交響曲第五番の主題を例にとれば、第一音（U_0）のソに続き、第二音（U_1）のソ、第三音（U_2）のソ、そして第四音（U_3）の♭ミが次々に現れては消えていく（寺前 二〇〇九）。だがフッサールによれば、これらの音は失われてしまうのではなく、消え去った後も保持されつづける。この「過ぎ去りつつあるものをなおも現在へと繋

ぎ止め・保持するはたらき」（斎藤 二〇〇〇：四五）が「過去把持（Retention）」である。

音は鳴り始め、そして鳴り止む。そしてその音の持続統一の全体は、すなわち音が鳴り始め鳴り終わる全過程の統一は、それが鳴り終わったあと次第に遠い過去へ《後退する》。このような沈退の中で私はなおもその音を《把持》し、それを《過去把持》のうちに所持している。（Husserl [1928] 1966=1967: 34）

一音目の「ダ」（U_0）が鳴り、やがてそれは過ぎ去り、二音目の「ダ」（U_1）が鳴る。しかし、二音目の「ダ」（U_1）が鳴った時点で、一音目の「ダ」（U_0）は失われてしまうのではなく、過去把持（R^1_0）として保たれている。さらに三音目の「ダ」（U_2）が鳴ると、二音目の「ダ」（U_1）も過ぎ去るが、二音目の「ダ」（U_1）と一音目（U_0）の過去把持（R^1_0）は、それぞれ過去把持（R^2_1）（R^2_0）へと移行して保持される。そして、四音目の「ダーン」（U_3）が鳴った時点で、三音目の「ダ」（U_2）および過去把持（R^2_1）（R^2_0）がそれぞれ過去把持（R^3_2）（R^3_1）（R^3_0）へと移行する。時間図表の縦軸は、それぞれの時点において保持されているこの過



（斎藤 2000: 46）

図1　フッサールの時間図表

去把持の「連続体」（Husserl [1928] 1966=1967: 41）を表している。このように過ぎ去った音が失われてしまうことなく、そのつど過去把持の連続体として保持されているために、私たちはダダダダーン（$R_0^3 - R_1^3 - R_2^3 - U_3$）というメロディを聴くことができるのである。もし過ぎ去った音が保持されることなく失われていくのだとすれば、私たちが聞くのはダ（U_0）とダ（U_1）とダ（U_2）とダーン（U_3）という、現れては消えていく四つの音の系列だけだろう。

> メロディの延長［は］知覚作用の延長の中に単に点の継続としてのみ与えられている［の］ではなく、過去把持的意識の統一それ自身が、経過した諸音をなおも意識の内に《把持》し、そして統一的な時間客観、すなわちメロディ、に関係する意識の統一をさらに産出し続ける。（Husserl [1928] 1966=1967: 52）

これは冒頭の主題においてのみ生じるのではない。演奏が続く間、最終小節にいたるまで、過去把持は働きつづけ、主題の変奏が現れるたびに、冒頭主題が呼び起こされ、私たちはそれを主題の変奏として聴く。もし冒頭の「ダダダダーン」が保持されていなければ、私たちはそれを主題の変奏として聴くことはできない。そして、最後の旋律が鳴り、冒頭の主題から最後の旋律にいたるまでの過去把持の連続体全体が呼び起こされるとき、私たちは《運命》を聴いたと言うのである。

演奏が終了すると、もはや新たな根元的印象が現れることはなくなり、したがって新たな過去把持が付け加わることもなくなり、過去把持連続体の全体はしだいに沈殿していく。

メロディが鳴り止んで静かになると、その最後の位相にはもはや新しい知覚の位相が結合することもなくなり、あとはただ新鮮な記憶の位相がそれに結合するだけとなり、そしてこれには次々にそのような［記憶の（訳者補足）］位相が結合する。そこでは絶えず過去への後退が行なわれ、同じ連続的複合が絶えず変様され、そしてやがて消失するのである。なぜなら変様に伴って微弱化が起こり、遂にはもう気づかれなくなるからである。（Husserl [1928] 1966=1967: 42）

だがこれによってこのメロディは完全に失われてしまうわけではない。「第一次記憶が過ぎ去ったのちに、……あのメロディの新しい記憶が浮かびあがることがある」（Husserl [1928] 1966=1967: 48）。私たちは中学の音楽鑑賞の授業で聴いた「ダダダダーン」を思い出すことができるし、あるいはコンサートで聴いた「ダダダダーン」を思い出すかもしれない。フッサールがここで「第一次記憶」と言っているのは過去把持のことである。これに対して、第一次記憶が過ぎ去ったのちに浮かびあがる「新しい記憶」を、フッサールは「第二次記憶」あるいは「想起（Wiedererinnerung）」と呼ぶ（Husserl [1928] 1966=1967: 48）。

過去把持が根元的印象にすぐ接して、これを現在に繋ぎ止め、保持する非主題的・非対象化的な作用であるのに対して、想起は、過去把持連続体がいったん完結し遠ざかったのちに、ふたたびこれに注意を向け、これを主題的・対象化的に再構成する作用である（斎藤 二〇〇〇：四七－八）。フッサールにおいて、記憶は、第一次記憶としての過去把持がいったん非主題的に保持した経験を、のちに第二次記憶としての想起が主題的に再構成する、という二段階からなるプロセスとしてとらえられている。

野家啓一は、フッサールの時間図表の横軸の時間を「水平に流れ去る時間」、縦軸の時間を「垂直に積み重なる時間」と呼ぶ（野家［一九九六］二〇〇五）。水平に流れ去る時間は私たちが矢印によって表している時間であり、メトロノームの往復運動や時計の針の回転運動によって測定している時間である。これに対して、垂直に積

み重なる時間は私たちの記憶の中に沈殿している時間である。

(2) シュッツの社会的世界論

この二つの時間は個人意識の中だけに見出されるのではない。シュッツはフッサールの時間意識の分析を社会的世界における他者経験に拡張している。社会的世界においても、時間は水平に流れ去ってしまうのではなく、集合的記憶の中で垂直に積み重なっていくのである。

シュッツは、社会的世界を、他者の意識体験の与えられ方の違いに応じて、「ウムヴェルト（Umwelt）」「ミットヴェルト（Mitwelt）」「フォアヴェルト（Vorwelt）」「フォルゲヴェルト（Folgewelt）」からなるものとしてとらえている。

ウムヴェルトは「空間的・時間的直接性」（Schütz [1932] 1974=2006: 245）によって特徴づけられる領域である。

> ある汝が私と空間的・時間的に共存しているとき、私はこの汝について、汝が私の社会的ウムヴェルトに属している、と言う。汝が私と空間的に共存しているとは、汝が「身体的に」与えられているということ、しかも汝自身として、この特別の汝として与えられているということ、また汝の身体が［汝の意識体験を表す］徴候に満ちた表現領野として与えられているということである。汝が私と時間的に共存しているとは、私が真正の同時性において汝の意識の経過にまなざしをやることができるということ、汝の持続と私の持続が同時であること、我々がともに時間を経るということである。（Schütz [1932] 1974=2006: 245）

ウムヴェルトでは他者はいま私の目の前にいて、私はその姿を直接自分の目で見ることができる。私が友人と

話をしているとき、表現領野として私に与えられている友人の身体に、友人の声・表情・身振りなど、友人の意識体験を表す豊かな徴候が根元的印象として次々に現れるのを私は同時的に体験している。それらの根元的印象は新たな根元的印象が現れるたびに過ぎ去っていくが、それらは失われることなく、過去把持の連続体として保持されていく。しかし、やがて別れの時がくる。

> 私は友人と笑みを交し、握手をして別れを告げる。それから彼は遠ざかっていく。しかしなお彼は声が届く範囲内にあり、私に大声で呼びかける。次いで私はしだいに遠ざかっていく彼がなおも手を振っている姿を見ることができる。そしてついに彼は私の視野から消え失せる。(Schütz [1932] 1974=2006: 264)

握手をして別れを告げ、友人は遠ざかっていく。ついにその姿が見えなくなり、友人はウムヴェルトからミットヴェルトへと移行する。ミットヴェルトに移行してしまうと、もはや根元的印象が新たに付け加わることはなくなり、過去把持の連続体はしだいに過去へと遠ざかっていく。だが、友人についての経験はそれによって失われてしまうわけではない。シュッツによれば、過去把持の連続体はしだいに沈殿し「経験のストック」(Schütz [1932] 1974=2006: 127) として蓄積されていく。そして、私は友人と別れたあとも、自分の経験のストックに想起のまなざしを向けることによってそのつど「友人」の類型を再構成することができる。たとえその友人が亡くなったあとでも、私たちはこの友人の姿を自分の経験のストックの中に見出すことができる。

シュッツはミットヴェルトのもう一つの構成様式として「私のウムヴェルトの汝の過去のウムヴェルトとしてのミットヴェルト」(Schütz [1932] 1974=2006: 272) を挙げている。これはたとえば「私の友人が会話のなかで私の知らない友人の兄弟について話す」(Schütz [1932] 1974=2006: 272) ような場合である。このケースでは、私は、

友人が私の目の前で経験のストックを想起し「友人の兄弟」の類型を構成するプロセスを同時的に体験している。私自身の経験のストックから構成されるにせよ（「友人」）、ウムヴェルトの他者の経験のストックから構成されるにせよ（「友人の兄弟」）、ミットヴェルトは過去のウムヴェルトの記憶として与えられる。

ミットヴェルトはさらにフォアヴェルトへと連続的に推移していく。フォアヴェルトとは「私自身より以前にあった社会的世界、私がそれにまなざしを向けることが可能である以前に、すでに経過し去り、生成し去り、完了してしまったがゆえに、私の体験や持続とは共存せず、一度も共存することのなかったような社会的世界」（Schütz [1932] 1974=2006: 220）である。それは、私が生まれる以前にすでに過ぎ去った過去の世界である。

シュッツは「フォアヴェルトについての経験が一般にわれわれに与えられる特別な様式」（Schütz [1932] 1974=2006: 313-4）として二つの様式を挙げている。

> フォアヴェルトについての知識は、まず第一に、ミットヴェルトについての知識と同じように、ウムヴェルトやミットヴェルトの他我の伝達作用と結びついている。その内容は、伝達者自身の過去となってしまった体験（たとえば父の子供のころの思い出）であったり、伝達者の過去となったウムヴェルトやミットヴェルトについての体験であったりする。（Schütz [1932] 1974=2006: 314）

私の目の前にいるウムヴェルトの他者が経験のストックを想起して、私の生まれる前の戦争体験について話すのを聴くような場面である。あるいは私が戦争体験記を読んで、私が生まれる前の戦争について知るような場面がこれに当たる。

シュッツはフォアヴェルトの第二の構成様式について以下のように述べる。

第二に、私はフォアヴェルトについての経験を、それの証拠となる、最広義の記録や記念碑から手に入れる。(Schütz [1932] 1974=2006: 314)

ウムヴェルトやミットヴェルトの他者を介して得られない過去についての経験は、現在残されているさまざまな史料や痕跡を通して再構成するしかない。たとえば、広島平和記念資料館には、人の影が遺された石段が展示されている。それは原爆の熱線に灼かれて表面が白く変化した石の中で、人が腰掛けていた部分だけが元のまま黒く残ったものである。この石段を見るとき、私は、一九四五年八月六日午前八時一五分にこの石段に座っていた人がいたことを知る。

このようにして、ウムヴェルト・ミットヴェルト・フォアヴェルトは、垂直に積み重なる時間に沿って、さきほど別れたばかりの「友人」から、亡くなった「父」、その父から話を聞いた戦死した「父の友人」、さらには石段に影だけ残して亡くなった「原爆死没者」へと連続的に連なっている。

野家は、垂直に積み重なる時間を「一枚一枚の透明なガラス板にそれぞれ別個の図柄が描かれ、それらがうずたかく積み重ねられているというイメージ」(野家[一九九六]二〇〇五:二七三)として表している。過去把持の連続体は、それが完結するたびに一枚のガラス板となって静かに沈殿していく。私たちの「いまここ」の下方にはそのようにして沈殿したガラス板がうずたかく積み重なっている。シュッツが「経験のストック」と呼ぶのはそのようなガラス板の堆積である。そして、このガラス板の堆積を上からのぞきこむとき、私たちはそこに無数の死者たちの姿を見出すのである。

さきほどの問いに戻ろう。止まった時計が刻む、動いている時計が刻んでいる時間とは異なる時間とはなんで

あろうか。動いている時計が水平に流れ去る時間を刻んでいるのだとすれば、止まった時計が刻む時間とは垂直に積み重なっていく時間ではないだろうか。

4　二つの時間が出会うとき

はじめに挙げた止まった時計をもう一度見てみよう。これらの時計はいくつか共通の特徴を持っている。第一に、これらの時計はいずれも多数の人が亡くなった戦争や災害や事故に関わっている。関東大震災では約一〇万五〇〇〇人、広島への原爆投下では約一四万人、長崎への原爆投下では約七万人、日本航空１２３便墜落事故では五二〇人、阪神・淡路大震災では約六四〇〇人、東日本大震災では約一万八〇〇〇人が亡くなった。第二に、これらの時計の多くは戦争や災害・事故で多くの人が亡くなった現場あるいは現場近くに置かれ、一般に公開されている。第三には、それらの時計が置かれている場所の近くで一年に一度記念行事が開催され、その記念行事ではその時計が指し示している時刻に参加者による黙禱が行なわれる。またそれらの記念行事の多くがテレビで全国に中継される。

たとえば神戸市三宮の東遊園地に置かれているビーナス像を見てみよう。このビーナス像は一九九五年一月一七日午前五時四六分に発生した阪神・淡路大震災で倒れた。ビーナス像が抱えている時計はその時刻を指して止まっている。東遊園地のビーナス像前の広場では毎年一月一七日まだ暗い早朝から阪神・淡路大震災の犠牲者を追悼するための「1・17のつどい」という記念行事が開催される。竹灯籠が「1・17」の形に並べられ、参加者によって竹灯籠の中にろうそくが立てられる。そして、五時四六分が近づくと、ラジオの時報がスピーカーで流され、地震発生時刻の五時四六分になると参加者による黙禱が行なわれる。この様子はテレビでも中継され、テ

レビの前でも多くの人が黙禱する。会場では「火ぃ、出たからなあ」などと低い声で語り合う家族の声が聞かれる（二〇〇七年一月一七日調査）。

止まった時計が指したまま動かない時刻と一年間動きつづけた時計が指す時刻が一年に一度重なり、そのときに黙禱が行なわれる。その黙禱の中で止まった時計の針が一目盛進み、「あれからまた一年経った」ことを告げる。止まった時計は一年に一度「あれから五年経った」「あれから一〇年経った」「あれから三〇年経った」「あれから七〇年経った」というように、多くの人が亡くなった戦争や災害や事故以来、積み重なった時間の厚みを告げるのである。それは犠牲者たちがもはや生きることのできなかった時間の厚みであり、生存者たち[1]がそれらの事故や災害・戦争のあと生きてきた時間の厚みである。

デュルケムは『宗教生活の原初形態』において、「消極的礼拝」「積極的礼拝」に加えて、第三のタイプの儀礼として「贖罪的儀礼」を挙げている。それは「災害に直面させ、あるいは、ただ災害を想起して、これを嘆くことを目的とする悲しい祝祭」（Durkheim 1912=1975: 276）である。そしてその一つとして「喪」を挙げている。「個人が死ぬと、所属していた家族集団は……抱擁し合い、絡みつき、能うかぎり互いに身を寄せ合う」（Durkheim 1912=1975: 293）。そして、これは集団の存続のために不可欠である、とデュルケムは述べる。「社会にふりかかり、これを減殺する衝撃に対して、彼らが無関心にとどまっていることを許すのは、社会が、自ら当然もつべき場を彼らの心のうちに占めていない、と宣言するに等しいであろう。それは、社会そのものの否定ともなるであろう」（Durkheim 1912=1975: 293）。デュルケムはオーストラリアの原始的な社会についてこれを述べているが、社会である限り、これは近代社会についても当てはまる。二つの時間が出会うときに行なわれる黙禱は「贖罪的儀礼」の近代的な形態であると言える[2]。動いている時計は生きている人間の間の相互行為を調整するうえで不可欠である。近代社会は動いている時計なしには存続することはできない。しかし、動いている時計は

生き残った人間が死んだ人間と出会うための役には立たない。止まった時計は生き残った人間と死んだ人間が一年に一度出会うための約束の時刻を指している。そして、一年に一度動いている時計が指す時刻と止まった時計が指す時刻が重なるとき、黙禱が行なわれ、その黙禱の中で生き残った人間と死んだ人間の間の沈黙の相互行為が生じるのである。[3] シュッツが述べるように、社会が生きている人間だけで成り立っているのではなく、死者たちもまた社会の一員である限り、近代社会が存続していくためには、動いている時計だけではなく、止まった時計もまた不可欠なのである。

（1）ここで「生存者（survivor）」とは「肉体的にせよ精神的にせよ、なんらかの形で死と接触し、現在なお生きつづけている者」（Lifton [1968] 1991=2009: 282）のことである。この「生存者」には狭義の「生存者」と広義の「生存者」がある。狭義では「生存者」とは戦争や災害・事故に遭遇して生き残った人のことである。しかし、広義では「生存者」とはそれらの戦争や災害・事故の後を生きる人たちを意味する。広島で被爆者調査を行なったリフトンは「われわれはすべて広島を生きのびた者であ［る］（we are all survivors of Hiroshima）」（Lifton [1968] 1991=2009: 282）と述べた。狭義の「ヒロシマの生存者」とは被爆者のことである。しかし広義では、被爆者に限らず、ヒロシマの後をヒロシマと向き合いつつ生きる人々はすべて「ヒロシマの生存者」である。非被爆者でありアメリカ人であったリフトンが「われわれはすべてヒロシマの生存者」であると言うことができたのはこの意味においてであった（浜 二〇一三 a）。そして、この意味では、私たちはすべて関東大震災の生存者であり、ヒロシマの生存者であり、ナガサキの生存者であり、日本航空１２３便墜落事故の生存者であり、阪神・淡路大震災の生存者であり、東日本大震災の生存者なのである。ソフトンの「生存者」概念については（高山 二〇一六）を参照。

（2）ノラは象徴的な「記憶の場」の一つとして一分間の黙禱を挙げている（Nora 1984=2002: 48）。

（3）「生存者と死者の間の相互行為」という概念にはなにも神秘的なものは含まれていない。シュッツは、フォアヴェルトの他者との社会関係の特徴について、「フォアヴェルトに方向づけられる私自身の行動は、決して他者影響

ではなく、むしろ……他者に影響された行動である」(Schütz [1932] 1974=2006: 313) と述べている。ここで死者との相互行為について語るのも、この限定された意味においてである。

参考文献

Durkheim, É., 1912, *Les forms élémentaires de la vie religieuse: le système totémique en Australie*, Felix Alcan (＝一九七五、古野清人訳『宗教生活の原初形態（下）』岩波文庫).

Giddens, A., 1990, *The Consequences of Modernity*, Polity Press (＝一九九三、松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か?』而立書房).

浜日出夫、二〇一三a「結びに代えて—「われわれはすべてヒロシマの生存者である」—」浜日出夫・有末賢・竹村英樹編『被爆者調査を読む』慶應義塾大学出版会.

浜日出夫、二〇一三b「クロックタイムの成立と変容」山岸健・浜日出夫・草柳千早編『希望の社会学』三和書籍.

Husserl, E., [1928] 1966, *Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins, Husserliana Bd. X*, Martinus Nijhoff (＝一九六七、立松弘孝訳『内的時間意識の現象学』みすず書房).

Lifton, R., [1968] 1991, *Death in Life: Survivors of Hiroshima*, University of North Carolina Press (＝二〇〇九、桝井迪夫・湯浅信之・越智道雄・松田誠思訳『ヒロシマを生き抜く（下）』岩波現代文庫).

野家啓一、[一九九六] 二〇〇五『物語の哲学』岩波現代文庫.

Nora, P., 1984, Entre Mémoire et Histoire, in: *Les Lieux de Mémoire*, Éditions Gallimard (＝二〇〇二、谷川稔監訳『記憶の場（第1巻）』岩波書店).

斎藤慶典、二〇〇〇『思考の臨界』勁草書房.

Schütz, A., [1932] 1974, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt: Eine Einleitung in die verstehende Soziologie*, Suhrkamp (＝二〇〇六、佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成〔改訳版〕』木鐸社).

Simmel, G., [1903] 1957, "Die Großstädte und das Geistesleben," *Brücke und Tür*, K. F. Koehler (＝一九九八、居安正

訳「大都市と精神生活」『新編改訳　社会分化論・宗教社会学』青木書店）.
高山真、二〇一六『〈被爆者〉になる』せりか書房.
寺前典子、二〇〇九「音楽のコミュニケーションにおける内的時間とリズムをめぐる考察―シュッツ音楽論およびフッサール現象学からのアプローチ―」『現代社会学理論研究』第三号.